

紹介

福江 充著

『江戸城大奥と立山信仰』

本書は、著者の立山信仰研究の五冊目の著書となる。著者の立山信仰研究は、立山曼荼羅研究と布橋灌頂研究を二本柱として展開してきたが、本書は立山の信仰圏研究に本格的に取り組んだことに大きな特徴が存在するといえよう。

本書の構成から紹介を始めたい。第一章「加賀藩芦峠寺衆徒の檀那場形成と廻檀配札活動」では、立山山麓の宗教集落のひとつである芦峠寺について、近年に富山県の立山博物館で特集展示が行われた三禪定に関わる史料から檀那場の分析が行われている。この三禪定とは、富士山と立山、そして白山の三つの山を巡るものであり、江戸時代前期から行われていた。この広い範囲にわたる巡礼ルートが立山信仰の檀那場の形成に寄与するようになったのであり、その信仰圏の拡がりには巡礼ルートにほぼ対応しているという著者の指摘は興味深い。

続く第二章「芦峠寺宝泉坊の江戸での檀那場形成と『立山信仰』の展開」は、いわば本書の基軸をなす部分である。序章で紹介された宝泉坊の檀那場に関する古文書の発見が本書に結実したのであり、著者の長年にわたる立山博物館勤務を通して地元の芦峠寺の住民との交流を深めてきた結果として、古文書の発見につながったことは、まさに地域研究の理想的モデルとなる。それらの古文書の分析から、江戸城下町における立山信仰は、大奥と諸大名のみならず、商人や吉原の人々もまた檀那場の中核となっていたことを実証した点にも注目すべきであろう。吉原に立山信仰が浸透したことは、後述の血盆経信仰との関連でも興味深い。

そして第三章「江戸城大奥と諸大名家の立山信仰」では、幕末期の老中であつた松平乗全をキーマンとして、立山信仰が江戸の城下町、とりわけ大奥と諸大名の間に浸透していく過程が解明される。松平乗全が立山曼荼羅の宝泉坊本と関わっていたことは早くから知られていたが、彼と江戸の立山信仰の関係が解き明かされたことは大きな成果といえよう。

さて、本書の後半では、著者のもうひとつの研究テーマである布橋灌頂と江戸城下町における立山信仰との関わりを中心に論が展開していく。第四章「芦峠寺の布橋大灌頂」では、最近の研究成果を踏まえて布橋灌頂が紹介され、続く第五章「江戸城大奥・諸大名家と布橋大灌頂」では、宝泉坊の古文書に含まれる三冊の布橋大灌頂勸進記が分析され、寄進者には数多くの大奥女中や諸大名家の人々の名前が記されていることが明らかにされた。この布橋灌頂は、従来は女人救済儀礼として知られてきたが、寄進者には男性も少なからず含まれており、極楽往生を願うのには男女の差はなかったことが明らかになった。

最後の第六章「江戸城大奥・諸大名家と芦峠寺の血盆経信仰」では、女性を血の穢れから救うとされる血盆経信仰との関わりが考察されている。立山山中の地獄谷にある血の池地獄に参詣者が血盆経を奉納すると伝えられてきたが、史料の分析から芦峠寺衆徒が血盆経の奉納を代参していたことが明らかにされた。立山山中は、もうひとつの宗教集落であつた岩峠寺の支配下にあったため、このような代参奉納が考案され

たのであろうか。この血盆経への寄進は大奥や諸大名家の奥女中の女性が主体であり、布橋灌頂への寄進とは対照的なことも明らかにされた。

以上のように、本書は新出の宝泉坊文書から江戸城下町における立山信仰の浸透過程を解明したものであり、評者が一九八〇年代に立山信仰の調査を始めたころには、ほとんど明らかにされていなかった信仰圏という大きな課題を掘り起こした画期的な成果であるといえる。

(A5判 五〇一頁 二〇一一年八月)

法蔵館 税別一〇〇〇円)

(岩倉通明 山形大学教授)

丸山俊明著

『京都の町家と火消衆』

——その働き鬼神の如し——』

本書は、前著『京都の町家と町なみ』（昭和堂、二〇〇七年）に続いて、著者が近世京都の都市構造と火消衆をテーマとした既発表論文を集めたものである。木造建築の多い近世都市の消防対策は、そこに生

きる住民とともに、為政者である江戸幕府にとって極めて重要な課題であり、従来も都市社会史・政治史などの多様な視点から研究がなされてきた。その中で、本書の分析手法として注目されるのが、消防対象である町家の建築的変遷（防火性能など）が諸所で踏まえられている点であり、著者の専門分野である建築史的なアプローチが活かされている。さっそく本書の概要を以下に示そう。

まず、京都所司代・町奉行の火消と大名火消に関する考察がなされる。近世京都で制度的に存在した①京都所司代と京都町奉行による火消と②京都周辺の諸藩の大名による大名火消について、実際の火事現場での指揮権の所在を分析するとともに（第一章）、大名火消の全体像を解明する（第五章）。また、禁裏御所を担当する禁裏御所方火消について、享保期の改革によって洛中の消防を兼務することになったものの、洛中の町々の消防には積極的ではなく、あくまで禁裏御所が最重要の消防対象であったことを指摘する（第三・四章）。これらの分析から、右記の為政者側による火消の有効性に疑義を呈する。

これに対して、著者は、町人による消火活動である町火消を積極的に評価する（第二章）。具体的には、町が定めた掟に見られる消火活動に関する規定に注目することなどを通じて、町火消が実際にどのような存在・機能していたかという実状を明らかにし、町火消の有効性を論じている。先行研究における「町人＝消火活動を忌避した」という図式に対して再考を迫る、本書の核の一つとなる主張である。これと表裏になっているのが、町家の構造に注目した分析であり、町家の図面を呈示しつつ、いかに火災が建物内で広がるかにまで言及することによって、町人による消火活動と町家の建築が有機的に関連させられている。こうした町火消以外の火消に関する検討も行われており、妙法院境内などの消火活動を担った寺社火消（第六章）や、近隣村落の百姓による消防活動（第七章）についても分析がなされている。

また、著者の建築史的な関心が直接的に窺える議論として、京都の町家の軒先に設置された板（第八章）と町家の看板（第九章）に関する考察が挙げられる。前者では、板の存在意義が、火消による屋根上での作